

◆特集◆

創刊一一〇年企画『幼児の教育』アーカイブズ集 3

雑誌は時代と共に、人と共に

—編み終えての語り、編集後記を中心に—

菊地知子

◆「その時」を生き生きと伝えるものとして

一一〇年も前から編まってきた、雑誌としては日本最古参のこの『幼児の教育』は、いつの時代のどの号も、その時代に生きる「生きた人間」の手から生まれました。作り手の思いは、時代と無関係ではいられないでしょう。否、雑誌とはまさに時代の子。作り手は常にその時代時代の「生きている人間」でしかあり得ませんから、その時代時代を生きたその人の残してくれた言葉を通して、私たちはその時代

をかろうじて知ることができます。

今回アーカイブズ特集を組むにあたって、編集後記には、冊子に込める思いと時代への思いが凝縮しているのではないかと筆者は考えました。冊子を編む者がその時々にふと感じたこと、考え方続いていること、見聞きし心に残っていることを、書き手は変わりながらも嘗々と書きつなげてきました。私たち読み手は、それらの編集後記を通して、現実として向き合うことはできなかつたあれこれに、あたかも立ち合っているかのごとく、擬似的にではあれ臨床

的に、その時代を体感し歴史を読むことができるよう思います。活字はここにこうして残り、活字に残してくれた人は今ここには居ませんが、それでもまるでその人が居るかのように、ここに生きて息をしているように感じるページがあります。いや、逆かもしれません。読み手である私たちが、活字を残してくれたその人の吸っていた同じ空気を吸つているような、また、においを感じるような、ライヴな感じ、とでもいいましょうか。作り手が、行間に込めたもの、包まれていた雰囲気や空気。作り手の思い、時代性、即興性、季節感。それらが、活字ではあるけれど生きた人間の語りとして伝わつてくる、その最たるもののが編集後記であるような気がします。

もう、人の文字を活字に置き換える作業の行程は、時代と共にずいぶん変わりましたが、活字を通して伝えられるものは人の声であり人の思いであり考え方であることは変わらないでしょう。

アーカイブズ企画三回目の今回は、読み手と作り

手をもつとも生き生きとつないできたかもしれない編集後記やそれに類するコーナーに注目し、読み手と書き手を実質的につないだ各号の最終ページ部分の「語り」に、まなざしを向け耳を傾けてみようと思います。

本稿で取り上げた記事は、文字遣い等なるべく当時のまま掲載するようにしました。

◆「編集後記」序説

一一〇年の歴史をひもとくと、各号を編んだ感想なりその時の編集者の思いを伝えるようなページがあり続けたわけではないことがわかります。時代が下つて、後記、あるいは編集後記が定番化してからも、たとえば一年を締めくくる十二月号には編集後記は載らずに総目録が載るようなことはありますが、雑駁にとらえたところ、戦後五年たつた一九五〇年

に「会から」という欄が設けられるまでは、誌面の

終わり方はさまざまでした。終わり方に限らず、各号の誌面構成にどうやら決まりしきことはほとんどなかつたようです。

『婦人と子ども』誌の時代に、巻末ではなく記事の合間に、倉橋による「机辺だより」というかなり長いコーナーがお目見えした一九一一年の一年を雑観してみましょう。

第十一卷第一号

「机辺だより」。クラーク大学の児童学研究。

同じ号に、「保育の実際」の寄稿求む、という記

事があり、これも以後コーナー化している。その第一回では野口幽香が学習院女子部幼稚園の保育の実際を紹介している。巻末には「雑報」というコーナー。

第十一卷第二号

「机辺だより」が二編。

巻末には「雑報」ならぬ「雑録」あり。

第十一卷第三号

やたらと廣告が多い。おしろい、聖路加病院、牛乳、山羊乳など。

「机辺だより」は無し。

第十一卷第四号

「机辺だより」はなく、「途上だより」という、通勤途中の光景などの挿話的な話が三編載っている。

第十一卷第五号

「机辺だより」等はない。

「保育の実際」は二編あり。学習院女子部幼稚部

と坂本小学校附属幼稚園のもの。

第十一卷第六号

「保育の実際」も、編集後記的なものもなく、ページもやや少なめ。

倉橋の手になる記事は複数あり、そのうちの一編「今月二十一日」という記事はフレーベルの命日について。

第十一卷第七号

「幼稚園と小学校の課業上の連絡」という幼小連

携的記事。

「保育の実際」への寄稿を和田実の名で募集。

第十一卷第八号

「机辺だより」復活。「幼稚園の改良 スタンレー

ホール氏」。子どもの言葉の採取のようなこと。

卷末ページには和田実の、千葉県岡田貞子氏に告ぐ、という尋ね人のようなコーナー。手紙を紛失して返事が書けないから、もう一度はがきをくれよ、という内容。

第十一卷第九号

「机辺だより」は無し。

「幼児預所に就て」という倉橋の文章。神戸保育園を見に行つてのこと。

第十一卷第十号

「机辺だより」あり。第八号の続編「幼稚園の改良 スタンレーホール氏（第二）遊戯に就いて」。

第十一卷第十一号

「机辺だより」あり。「幼稚園の改良 スタンレーホール氏（第三）幼児の興味と本能」。

第十一卷第十二号

「机辺だより」あり。「人形の研究 サリー氏」。

シリーズ化しているようなコーナーにも定式がなく、3ページが必要であれば3ページを使う。奥付はあるが、編集後記やそれに類する欄はない。雑記、雑録、雑報など、称し方も実にいろいろでした。

和 田 実

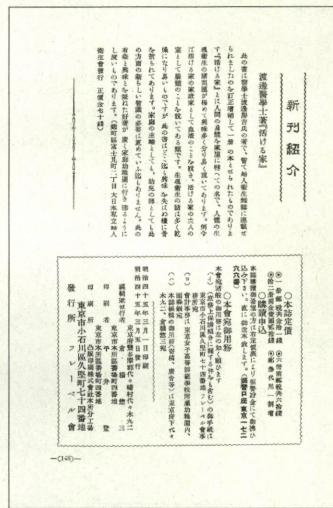
千 葉 県
岡 田 貞 子 氏 に 告 ぐ

先頃小生病中に頂戴致し候御手紙取込申紛失致し御宿所不明と相成り御返事差上兼候恐入候へども今一度御はがき頂戴致し度候

▲『幼稚の教育』第11卷第8号の裏表紙

名前、発売所、印刷所、あるころはそこに、発行所として倉橋自身の自宅住所なども見えました。

新刊紹介



▲『幼児の教育』第12巻第3号の奥付

◆ 軽妙さ自由奔放さの「おすそ分け」

「倉橋惣三と仲間の保母たち」による編集時代

一九二二（大正一一）年に「編集室より」という短い欄や「編集だより」があつたりしますが、編集を終えての辞、のような欄が、心して出てくるのは、「会から」というコーナーの出現を待つてのことであるようです。

ここでは、それに先立つ一九三三年の「たより」という欄を幾つか見ていくこうと思います。一九三三年、昭和八年といえど、すでに八十年近くも前です。

それでも、東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大学）附属幼稚園の園舎が現在の大塚の地に移り、新しい場所で保育にあたれるうれしさ、晴れやかさ、旧知の仲間との再出発に浮き立つようなうれしさが、私たち読み手にも感じ取れるようになります。

ここでは一九一年について見てみましたが、この巻に限らず、奔放に、とまで言つては言が過ぎるかもしれません、発刊以来ずいぶん長い間、多分に編集諸子の自由裁量で誌面が構成されていたことが各年代の誌面、こと巻末の、今でいう奥付と編集後記、次回予告の載る欄からうかがえます。

奥付もまた、見るのに楽しいところです。定価○円（時代をさかのばれば○銭）の文字や、編集人の

「たより」

第三十三卷第三号（一九三三年）

音羽町に引越したのが、丁度幼稚園で最も忙しい新入園検定のころ。明日は抽籤といふ日の歸りに、明日は八時迄に來なくちや間に合はないのね。

○今年は格別雪が多うございました。お茶の水では雪だるまでも作るのがせいじぐでしたのに、さすがに廣々としたこの庭では、雪合戦、雪すべりと

遊びが大きく、幼稚園の爲に特に降つたかと思はれる程活氣づいて來ます。色とりどりの小さな手袋がストーヴのあみに並ぶのも、雪の日の可愛い、情景でござります。

○何ごとにても宜しく、みな様からのお便りをおまちして居ります。

○倉橋主事は本校から帽子と外套をかゝえてお出でになりました。なんとその外套は、女子高等師範學校中にて最も偉大なる體軀のM教授のものであります。私がお見かけした時は一寸こんな様子。M教授の方ではどんなでせう。私の繪心だけでは描けません。

○音に名高き人形芝居の菊池さんは郊外から近くの

▲
当时誌面の挿絵
○神原さんは大のスキー禮譜者。雪といふ字を見ただけで、胸がときめくさうですから、執着心は腕前によらないと見えますね。それが、紀元節日曜とつゞくスキー列車の満員の日、躍る心を抑へてわが家につゝしんでゐました。それは翌日が幼稚園抽籤なのでその理由はかうです。

私、スキーに行くとこの上真黒になるでせう、

さうよ、ぢや一番近い菊池さんに萬事お願ひすることにしませう。

ぢや、この掲示もみんな。

ついでに椅子の雑巾がけも。

といふわけで朝になりました。肝心の當の人は七人の七番目、おごるわ／＼何でもおごる（わ）と駆け込み、起きたのが八時近くだつたそうです。間もなく白十字のショートケーキを御馳走になつたのはいふ迄もありません。

さうすると、抽籤に澤山人が集つて来て、あら、この幼稚園にこんな真黒な先生が居るのかしらつて思はれたら、主事にすまないぢやありませんか、だから我慢するわ。

然し皆様御安心下さいませ、倉橋主事はよにも稀なる心の寛い方ですから黒からうが、青からうがそんな御心配には及びませんのに。

○編輯子はじめて本欄でお目見得致します。昨年の暮に、「たより欄」をおくやう、新庄氏から獎められ、OK！とばかり承知しておきながらのびく

になつて居たのですが、それに業を以やしたのでせう、二月號に獨りで同氏が皮切りしてしまひました。ところが豫想以上に好評なので、若しかして私がおほめに預つては誠に相済みませんから、こゝに名譽を受ける人を明らかに致す次第です。

○いよいよ昭和七年もこれでおしまひ。今は園児をおくり又迎へる、重なる準備でお忙しくいらつしやいませう。今月は幼稚園の年頭號として編輯いたしました。「新保育期の計畫と所期」「新入幼兒

のむかへ方」の多數實際家の御言葉は、よろこんで頂けるものと存じます。學校關係は何處も年度末の御多忙と見え、今月はお約束の原稿で、頂けぬものが多くて殘念でした。

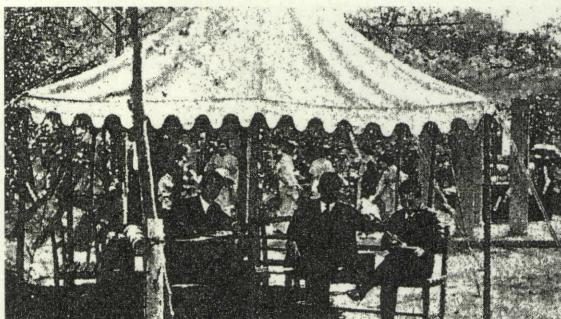
○この新園舎の様子をのせるやう、皆さんから御催促をいたゞいて居りますが、「お茶の水時代」も本號でをへましたので、來月號から追々に「新園舎すまひ」を掲げる積りで御座います。（神原）

「たより」

第三十三卷第六号（一九三三年）

○こゝしばらくはい、陽氣でござりますね。六月の始め完成した當幼稚園の庭でみどり會主催の園遊會がありました。

○幼稚園界の皆様へ、もし萬一どなたかがおでんやか、おだんごやを開業なさる事になりましたら、その看板は、倉橋主事にお頼みなさいまし。大したものでござりますよ、元來ビラ的藝術的味たつぱりの生れつきらしうござりますから。園遊會で



▲当時の誌面掲載の写真

のビラは全部同氏書のもの、十幾枚が、五分間で出来上りました。しかもおでんやのお小さんには、是非と見込まれた程の腕前、一寸お知らせ申上げます。

○これは、吉岡校長、堀小學校主事、幼稚園主事お揃ひの一場面。校長は第一回のおでんは全部地べたへ墜落、満場

喝采裡に第二回
目をこゝ迄御持
參、左の頬がふ
くらんでゐます
ね、蒟蒻でもは
いつてゐるので
せうか。

眞中の堀主事を
見て下さい。こ
の時はすでに、
おでん、みつ豆、
おだんご、カル
ピス、お菓子と、凡そ食べるものは、さつさと食
べてしまつて、丁度子供が、自分の所有は大急ぎ
で食べてしまつて、お兄ちゃん達のを羨しさうに
見てゐるつて、恰好に見えませんかしら。

○下のは、おわかりでせう、少しピントを外して寫
せど、紙製シルクハツト氏の仰せで、御意のま、
にしておきまし

豆の所。ずゐ分
はじつこで食べ

た。こゝはみつ
豆の所。ずゐ分
はじつこで食べ

てゐる方があり

ますね、お向ふ

のは古川、及川

兩氏。何て、先

生ばかり一生懸

命食べてるので
せう。

○小雨ふる日。珍



▲当時の誌面掲載の写真

た幼稚園の午後。元老不在。折柄洩れくるピアノのメロディー。久しぶりに聞く神原さんの「流浪の民」です。同女得意の一曲、但し始めの一節だけがそれに聞えるといふので任官七年以來有名なのでございます。これに合せて、村上、河合、小島諸娘の合唱。おや、椿姫も聞えて來ましたよ、まあ、アヴェマリヤも、君よ知るや南の國だの。でもね、かうして聞いてる私がセンチになりそくなつて、ほんとに殘念でございますよ。（新庄）

〔たより〕

第三十三卷第七号（一九三三年）

○今日は新庄さんから原稿が廻つてしません。察するところ、毎月の口わるのたゞりでもありましたか、こゝ暫くなりを静めて居るので御座いませう。

○口わるといへば、お口の倉橋先生が先（週）中よりお口のいたつきでお休みでした。私達どんなに心配したか知れません、今度の講習では立役者なのですから。これ許りは代役不能ですし、第一お

お客様が承知して下さいません。でももう御安心下さいませ。二三日前より御出勤で當日迄には大丈夫御本復と、信用ある醫者の證明があつたやうですから。

○今夏の講習は、はじめて午前午後通じて本會が主催するを機會とし、大いに新機軸を失したものと、私共は力みかへつてゐるので御座いますが、この期待を裏書きするやうに、先號が發送されまことに早速おほめやら御鞭撻、共鳴のお便りと一緒に質問が續々とまゐりました。多數の待望する所だつたと見えます。何卒この試みが充分活用されて劃期的な講習にし度いものです。皆様どしき問題をお出し下さいませ。問題は成るべく早く頂いた方が好都合で御座います。

（編輯子）

保姆たちはきっと、保育以外にもたくさんの時間を、仲間と共に過ごしたのかもしれません。誌上でも、皆茶目つ氣たっぷりで、彼女たちの目の前で起

こつてていることや繰り広げられたこと、今まさに聞こえてくることなどを愉しそうに書いていることがうかがえます。

近しい者同士がくすぐり合うような雰囲気やそのような文字の上でのふざけ合いは、内輪受けと言つてしまえばそれまでですが、実際の日々においてもそれらが許されていたおおらかさや飾り気の無さに、時代の移り変わりとともに失われた、あるいは失いつつあるかもしれない何かしらを感じることも確かです。

◆語る相手を感じ続けて

時代をぐつと下り、以下に載せるのは、戦後一年から数年というころの誌面の「会から」という欄のものです。戦後『幼児の教育』が復刊した時からしばらくは、編集後記にあたる巻末部分に「会から」と題した一文が載るようになりました。「会から」とはすなわち、『幼児の教育』の母体であるフレーベル会からのお知らせ、ということであり、夏の講

習のお知らせがあるから早めに出した、参加は無理をしないように、などと書かれることもありました。語りかける相手は、実際に保育にあたっている人たちであることがはつきりとしています。そのころの記事の中にも、たとえば一九五〇年の八月号に「みなさま毎日幼児の教育に全身を打ちこんでおられると思います」等と書かれています。実践者に宛てて書かれていることがわかります。

また、倉橋による「会から」は、往々にして非常に多弁です。各号の本編記事の紹介にとどまらず、読者の注意を喚起したり、世の中の動きについて報告やお知らせをしたりと、違う種類の内容をさまざま盛り込んでいることも少なくありません。つまりは、編集後記と意識されたページに先立つて現れた「会から」というコーナーは、その号を編み終えての補足やお知らせなど、掲示板的な要素が強いということなのかもしれません。

それにしても終戦から一年、一九四六（昭和二二）年九月に第四十五巻第一号を出した時の編集者たち

の気持ちたるや、いかなるものであつたのでしょ
う。その号の「会から」を、まずはひもといてみた
いと思います。

「会から」

第四十五卷第一号（一九四六年）

○本誌は復刊と共に編輯機構を擴充強化し、現代保育研究の權威者の積極的協力によつて、新保育の専門誌たる實を擧げることを期した。且、日本幼稚園協會の責任編輯に變りはないが、恩賜財團愛育會内日本保育研究會、大日本教育會幼兒保育専門部會、その他保育會の綜合資料によつて、わが幼稚園協會の責任編輯に變りはないが、恩賜財團愛育會内日本保育研究會、大日本教育會幼兒保育専門部會、その他保育會の綜合資料によつて、わが企劃した。

○本誌の發行についても、印刷發賣發送等の實務一切を、フレーベル館に委托し、從つて購讀注文の申込、代金の拂込等の事務は、凡べて直接フレーベル館宛に願ふ。

○今日、用紙印刷等を始め、實際上如何に多くの困

難が伴ふかは御想像に餘る點がある。本誌の復刊が遅れたのもそのためであるが、その面倒を快く引受けられたことによつて、始めて復刊し得た。これ我が國保育界の發展を専念する、フレーベル館本來の誠意によるここと素よりであるが、本會としては特に同館に感謝するところである。

○しかも、本誌の充實と發展とは、どうしても誌友諸君の御支援と御協力によらなければ出來ない。



▲『幼児の教育』第45巻第1号の奥付

保育に關する御意見、御體験、また保育界の實情等につき御寄稿を歡迎すると共に、本誌に對する御希望、御高教をお示しいたゞきたい。尚、復刊に就て讀者の擴張についても、有力なる御盡力を希ふ。

○わけてもお願ひ致したいのは、お移りになつたり、新らしくお開きになつた幼稚園は勿論、變りなく盛にやつてゐるといふお報道やかういふ計畫中だといふ御報告や、御自分のもお知りあひのも、是非お通報いたゞきたいことです。誌友名簿を確實にする爲に。

戦後どのくらいで世の中はどのくらいの平穏さ、平和な状態を取り戻したのでしょうか。いや、おそらくは、取り戻したのではなく、まだ見も知らぬ平和な社会を、新たに創造しようと始めたということでしょう。戦渦が歴史のことになるにはおそらくまだまだ近過ぎる過去であった戦後五年というこ

ろ、新しい希望はどれほどそのつぼみを開花に向けて柔らかくしたのか、わかる由もありませんが、一九五〇（昭和二五）年、第四十九卷第八号の「会から」の欄には、認定講習のことや誌上で取り上げた新たな論考のことなどと並んで、すぐお隣り朝鮮半島での争いへの心懸かりが綴られています。おそらく日本にとつてまだまだ完全に過去の歴史になりきらない、することのできない「あの」戦争というものが、今の世界にしかも非常に近いところでまた起つてていることへの憂いは、表明するに憚ることなく記すべきこととして倉橋の中にあつたのかもしません。

また、翌一九五一年の第五十卷第六号は、フレーベル一〇〇年を記念する祝賀号というような趣きで、巻末の言もほぼそれ一色です。先に見てきた『婦人と子ども』時代から、批判も含め大いにフレーベル研究をしてきた倉橋にとって、また、彼の名を冠するに至った出版社とのつながりの深さにおいても、フレーベルの死から時を経ること一〇〇年、という

事実は、非常に感慨深いこととしてあつたのでしょ
う。また、フレーベル一〇〇年にかこつけてであ

れ、子どもや人間を学ぶ者であれば繰り返しその意義を確認するに足る「児童憲章」への言及があること、児童の幸福を希求しようとする動きへの共感として受け止めることができます。

そのころの「会から」より二編を以下に掲載します。一つめは一九五一年の第五十卷第十二号。五十卷を終えることへの感慨に、「保育界全体のものとなるために」全体の希望に副うものになりたい、と言ひ、読者には、記事の精読や研究を勧め、子どもたちにも健康が守られるようにと祈ります。

また、第五十一卷第二号では、お得意の洒落も混ぜながら、寒さの中の保育があたたかく行われるようにと、話して聞かせるような名調子で綴られています。ここでもまた、語りかける相手が、実際に保育にあたっている人たちであることが明確であるよう思います。

「会から」

第五十卷第十二号（一九五一年）

○本巻を終りあわせて本誌第五十巻を終ります。第五十一巻を迎えることは、編集に新しい緊張を感じさせます。と共に、一層の新しい御好誼を願わずにいられません。

○編集の方針、その他についても、充分の御注意なり御勧告なりを願います。保育界全体のものとなるために、先づ全体の御希望に副うものになりたいと心がけています。

○上沢氏は童話界の先人。話の選び方は常に話し方に先だつ重要性をもつ問題。精読の上充分考えを養つて下さい。

○村山氏の論文は、読むばかりではなく、各幼稚園、各保育所で、必ず実行されなくてはならないこと、しかし、必ずしも容易でない実際問題を懸切に説いていられます。是非研究し実行して下さい。

○おい／＼寒さが増します。先生方の御健康を祈ります。先生方がかぜをひいて休まれるのも困るこ

とですが、こん／＼せきをされるのも、子どものために心配です。充分おだいじになさつて下さい。

○よき新年を迎えるように。

「会から」

第五十一卷第一号（一九五二年）

それが無かつたら、何とか設備したい。大工さんに一日も働いて貰えば容易にできるだろう。先生方にだつてむつかしい仕事ではない。ピルグリム・コツテーチ風の極く簡単なのでいゝし、却つて趣きがあるだろう。先生は不器用でも困るが、不精では尚困る。

○二月の窓を開けば風が寒い。窓を閉ざしつゞけると室内の空気が悪い。殊に火鉢などを用いているとき、二酸化炭素が健康を害する。窓一つ、あけようか、しめようか。先生の気ばたらきはこまかい。

○二月の保育室には必ず、寒暖計が備えつけられなければならぬ。しかし、備えつけてあっても、見なければ備えつけてないのも同じである。見ても、標準の度が分つていないと、見ないのと同じである。こわれているに至つては室の装飾にもならない。

○晴れた日のテレスに日だまりの暖かさを樂める設備は、洋風建てには一つの必要といつてもいい。小鉢の一つ二つ、迎春使として南の窓においてやりたい。若し、南斜面のところでもあつて、草

の芽が楽しめる仕かけになつていたら、早春のため

に門を開けておいてやるようなものだ。それら

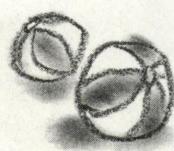
の待ちもうけして子供らと共に、春の若神を迎える

に出でまし給う先生の楚々たる歩みの、いとゞみ

やびにいますことよ。二月の女神ともいおうか。

○二月鍛錬も、新興小国民の保育に必要かも知れない。しかし、ぬれ足袋保育、凍り弁当保育、こわれ障子保育、せきコン／＼保育、などは、タンレンを越えるかもしれない。少しはレンタン保育を加えて、子供を弱くする所以ではあるまい。

○毎年の出欠表を出して、二月はどうも風邪欠席が多いのが通例ですとおつしやるがそのかぜをひかせる保育法が通例という訳でもあるまい。幼い子供の病気は、まだまだ、おとの不注意からですぞ。その不注意なおとなの中に先生が居ては申訳ありませんな。二月の感想です。



◆「幼児の教育」新時代の訪れ △継承のみでは語れない創造展開

一九五五（昭和三〇）年の、その名もまさに「編集後記」を二回分、見ていただきたいと思います。

一つめは第五十四卷第一号、すなわち年初に出されたもので、記名こそありませんが、当時の編集後記の常で、倉橋の手になるものと思われます。

そして、その年十二月の第五十四卷第十二号には、新編集主幹津守真によると思われる「後記」が見えます。第一一〇卷第二号において本田和子氏が確認されたとおり、「幼児の教育」誌は、「倉橋なくして本誌なし、また本誌なくして倉橋は倉橋たり得」なかつたのでしよう。しかし、倉橋の死をもつて新時代へと舞台を移した「幼児の教育」を牽引した津守のなそうとしたこと、またなし得たことは、倉橋の遺産を引き継ぎ、内容形式とも、その継承、維持に努めただけではなかつた、というのが筆者の見解です。誰もが認める「幼児の教育」の立役者倉橋の、

次なる主幹となつた津守の独自性、子どもたちの、私たちの、今はどうなのか、未来はどうなのか、ということのみを、人を信じ明日を信じて愚直なまでに大まじめに問うた革新性を、今回編集後記を中心にお読み直す中で改めて強く感じました。そしてそのことを、ほかならぬ倉橋が驚きと共に見抜き、齢にして四〇以上も違う津守真という若造を信頼し敬愛したのではないかと思います。

筆者は大学時代を含め六年ほど、母子愛育会家庭指導グループで、津守と保育という営みを共にしてきました。恩師である以上に、保育者同士、仲間同志として付き合える幸運に恵まれていたからでしょう。津守の、ある意味いついかなる時も自分流で、年齢や立場に左右されず、誰のことも信奉したり崇めたりはしない姿、誰のことも対等に人としてあたりまえに尊重する姿を、僭越ながら知り得ています。編集主幹を引き継いだ一九五五年には、津守は弱冠二十九歳の若造ですが、それに数年先立つ出会いの時から、倉橋はこの生意氣で思つたままを何のひ

ねりも気遣いもなく言う若者の真価に気づいて、自分自身もより研究的な方向に舵を切り替え、遊び心たっぷりの軽妙な感じからやや脱却して、その後半生を津守真を同志として歩もうとしたのではないでしょか。

倉橋自身の言葉として津守に抱いた気持ちを聞くことはもはやできませんが、津守は、詳細な日記を手元に置きながら以下のように語っています。出典は『幼児の教育』第一〇九巻第二号におけるインタビュー記事『まめやかさ』——人として人に応える。ちなみに筆者も、このインタビューに同席し記事の構成をさせていただきました。

「一人の人間として出会う」というのが、先にお話ししたように、一番初めから、それはしっかりと私の中にあつた。倉橋先生には初めて会つた時から、この人は信頼できる人だと感じました。これもまた不遜な言い方かもしれないけれど、倉橋先生もそう感じられたのではないかと思います。」

以下、第五十四巻の記事二編です。

「編集後記」

第五十四卷第一号（一九五五年）

新らしい年、昭和三十年を迎える。来るべき年の曙に当つて、先ず読者諸氏と共に、心を新たにして青空に杉の木立が伸びゆくように、幼児教育のすくすくと育ちゆくことを祈る。

来るべき年は、我が国にとつては内外共に多事多難の年であろうが、幼児教育界にとつても平坦な道ではなさそうである。保育室の内外共に、解決すべき問題が山積している。行政経営、管理の面において、又保育の内容において、幾多の困難な問題が横たわっている。表面隆盛に見える保育界も、幾多の分裂と、解決されざる問題の山積によつて混沌としている。と云つては云い過ぎであろうか。よりよき社会と幼児教育の前途のために、純粹な努力を捧げる幼児教育の任に當る人々の努力によつて、いくらかでもよりよき方向に問題が解決されなければならぬ。本誌は保育界の諸問題に関する各方面の意見見

と、保育の諸問題に関する忠実な研究によつて、我が保育界が更に一步前進するよう望んでいた。直接、間接に幼児教育に關係される方々から、意見と研究とを寄せられる様お願いする。

新年号に當つて、久松幼稚園の高間富子氏からは新築園舎の夢をめぐつて、武南高志氏からは私立幼稚園界の抱負を、三木安正氏からは保育界における研究についての感想を伺つた。米国における幼稚園教育の全国大会に参加されての記事をよせられた黒田成子氏は、新らしい幼児教育を専門に研究された新進の保育研究者である。久々で幼児の健康について執筆された竹村一氏は本誌の古い誌友である。

「後記」

第五十四卷第十二号（一九五五年）

今年の一月号の本誌は、故倉橋惣三主幹の巻頭の言に始まつて、第五十四卷の半ばにして倉橋主幹の

天に召されたことは、本誌の五十四年の歴史の中でも誠に大筆すべき大事件であった。倉橋主幹の言葉をもつて始められた此の巻を終るにあたり、その半ばにはからずも特集することを余儀なくされた六・七月号をとりあげてみて、誠に感慨無量である。再び倉橋主幹の温情溢れる声に直接ふることのできない物足りなさを思うのである。されど倉橋主幹は天寿を全うされたとはいへ、本誌の使命は未だ終らず、我が国の幼児教育界はいよいよ進展し、発展の歩を進めてゆくであろう。長い歴史の眼から見れば、一つの事件は生成発展しゆく社会の一つの鎖にすぎない。倉橋主幹の四十年にわたり本誌に刻まれた足跡は、人も知る如く誠に輝やかしい足跡であった。私どもはかくして結ばれた鎖に又新たな鎖をつなげてゆくことができる。我が国の幼児教育の諸分野にわたって、更に新たな理解を加え、本道をふみはずすことなく、正しき方向に発展の道を進めるためには力を合わせることができる。現代の我々の社会

は、広い社会の問題はもちろん、一つの専門分野においても、相互の理解と協力を必要としている。正しい方向に我が国の幼児教育を進めるために、此の分野及び隣接分野に関してよりよき理解を求め、理論にそして又実際面に更によき洞察をうるために、今後も本誌はその努力をつづけるであろう。教育の問題は単に一分野の技術の問題にとどまらず、広く人間及び社会と関連するが故に、我々は一層広く大きい洞察を必要とするのである。本誌はその問題をたえず考えて來たし、又今後も考えつづけるであろう。そして我が国が社会が健全に発展するために、幼児教育を通して努力したい。

本巻は、予期しない行事がいろいろ出て來たために、誌面の都合で、掲載すべき論説や研究で収載しきれないものが沢山ありました。そのため読者及び特に執筆の諸氏に御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

読者諸氏のよい年を迎えることを祈ります。

◆保育の理論と実践研究の間での生まじめな邊巡

以下に挙げる論考は、編集後記やそれに類するものではありません。掲載された第八十九卷第十二号は、巻末に一九九〇年一年を通しての総目録があり、編集後記はありません。ある時期から、それが十二月号の常です。ただ、その号は筆者にとって、「特に書き足すことはありません。ただどうぞお読みください。お読みいただければわかります」という、編集後記がないことによるメッセージを受け取りたくなる号の一つです。その号には、当時日本保育学会長であった莊司雅子氏による巻頭言「キンダーガルテンの本来の意味」があります。サブタイトルには「幼稚園創立百五十周年を迎えて」とあり、そして件の「韓国の夏」という記事が続きます。署名は津守真、文末には愛育養護学校のクレジットが入ります。一九八三年にお茶の水女子大学を退官し、『幼児の教育』の編集主幹からも身を引いた氏であります。内容はといえば、今日この時代にまたしても、

時の政治との兼ね合いの中で議論喧嘩^{かまびす}しい「幼保一元化」について主に論じられているのです。

その人がそれを書く「その時」において、書かずにはおれない思いを抱いていることをそのままに掲載すること。それは、雑誌の体裁上のタブーも顧みずに、すなわち、季節感とか他の記事とのバランスや関連性など、細かいことにとらわれ過ぎることなく、『幼児の教育』という雑誌がただただ愚直に、書き手本位に、書き手への全面的な信頼の上で誌面を構成してきたことの証左であると思います。そして何より、その内容が当時の隣国の時宜になつてゐるのみならず、まさに私たちにとつての今日的な課題にも大いにつながるものであると考えます。その時の熱情でのみ語られたのであれば、その場しのぎよろしく風化していくのでしようが、津守真の、切実な析りにも似た言葉はどこか汎時代的汎空間的であり、時代を超えて、容赦なく私たちに判断や思考を要求しているように思います。

「韓国の夏」

第八十九卷第十二号（一九九〇年）

今年の夏の終わり、新学期の最初の日、私は韓国幼稚教育学会に招かれて、はじめて韓国に行つた。二晩だけの忙しい旅行だつたが、韓国の幼稚教育関係者たちの熱い思いに触れて、私は現代に生きていることを実感させられた。

韓国では、学校教育法のほかに、低所得層の家庭の幼児を対象にした幼稚保護法が制度化されようとしており、幼稚教育関係者の間に議論が起つてゐる。韓国社会は、丁度日本で学校教育法と児童福祉法とが二元化された以前の状況にある。それがいま、日本のように幼・保が二元化されようとしていることが、この法制化に対する反対の大きな理由である。ことに、「保護」だけが取り上げられ、託児という形で簡便に片付けられようとしていることも問題である。保護（養護）と教育とは、幼稚教育（あるいは幼児保育）において切り離すことはできないといふ考えが現代の世界の動向なのに、あらためて二元

化的制度を作つてよいものか、私も疑問に思う。

日本では、幼・保が二元化されているのがすでに当然のことで、その前提のもとに財政措置もなされてゐるから、児童福祉法のようなものが作られることは結構なことではないかと考える人が多いかもしない。しかしそれは現状を固定して考える考え方である。かつて、幼・保が二元化される以前、あるいは二元化された当初には、幼・保は一元化されるべきであるとの意見が多かつた。その当時は、幼稚園も保育所も、教育も福祉もすべてを含んだ児童省という大きな構想もあった。もしもそういうものが実現されいたら現在はどうなつていただろうか。韓国はいま丁度その分かれ道にある。

日本では幼・保二元化の制度に順応して、両者がそれぞれに機能を発揮するように努力がなされてきた。幼児数が増加しているときには、うまくいったのだろう。それでも幼稚園の隣に保育園が作られる

というようなことはしばしば起つた。また、保育

所だけしかない市町村、幼稚園だけしかない市町村などと、どちらかに偏在していいる地域もある。このことは、いずれが両方の機能を果たしていることになる。どちらか一方があれば、幼児期の保育機能はみたせると親は考へてゐることの証拠ではないだらうか。

現代の日本では、保育所は経済的貧困の家庭のみを対象にしているとは言えない。むしろ、経済的には裕福でも母親が働いていために保育に欠けると考へられる幼児が保育所に通う場合が多いだらう。働く母親は、今後も増加しつづけるだらうから、保育所の機能に対する要望は増加しつづけるだらう。

現代の家庭及び子どもの生活形態は急激に変化しつつある。長時間保育だけではなく、多様な要望に柔軟に応じる保育が必要とされている。家庭と保育施設との両方が協力して、幼い子どもが生活しやすいやうに人的物的環境をつくつてゆかなければならぬのが現代である。

高層住宅の中で子育てをしていいる若い母親は、乳児期から、母子に対して開かれた、自由度の高い共同の子育ての場を求めていいる。これが急務であることは、幼い子どもに少しでもかかわりのある人には分かっていることであるが、これは保育園の仕事なのか、幼稚園の仕事なのか。本来は両方の仕事であるが、制度上はどちらにもはいらぬ。子どもと家庭の要望にこたえることのできる柔軟な制度が必要とされる。英國で最近は、文教局と福祉局を統合したナースリーセンターが発展しているのは、このよ

うな社会変化への対応であろう。
四十数年の幼・保二元の制度の歴史を経た現在、日本の社会で直ちにこれを一元化したら混乱も生じるだらう。しかし、この両者が柔軟に協力しあう体制ができなければ、決して解決しないであらう問題が、私の周囲にもいくつもある。
まだ制度が二元化していない社会では、その経験

をへた社会での功罪をよく検討してほしいと思う。韓国の大児童教育学会の親しい方々から講演の依頼を受けたとき、私はこのようなことを考えて、これをお引き受けした。

九月初旬のソウルは、急に涼しくなった東京よりも暑いくらいだった。この夏は特別に暑い日々が続いたという。その夏の間、大児童教育関係者達は、この法案が早急に定められないよう、資料を集め、討論し、精神的にはたらいたという。この運動が成功するかどうかは分からぬが、一元化のために最大の努力をした事実を後世に残したいのだとその指導者達は語っていた。私もそのことをここに記録にとどめておきたい。

私は今回の講演では、制度を中心的に、この四十五年間の日本の大児童教育と保育について語った。そして、制度がどのように整備されようとも、そこでなされる日々の保育の質の向上が重要であることを結びとした。この現代に、子どもが生きやすくなるように、子どもの側に立つて仕事をする者には国境はないのだと思う。子どもの側に立つ戦いをしている人々は世界中にいることを、今回も私はあらためて認識した。

私が二晩泊つたヨンセイ大学のゲストハウスのすぐ前に、大学付属のナースリー・センターがあつた。夜になってから、わざわざ門を開けて案内して頂いた。

(愛育養護学校)

文末にある「子どもの側に立つ戦い」という一言は、今なお私たちに重く響くように思います。

さて、右の論考により筆者は、一九六六年の、就

学年齢引き下げについての特集を想起しました。子

ども学の徒として、子どもにかかる時の争点に、臆することなく論客を立て、思い思に書いてもら

い誌面に並べます。しかも、それを「思いついてし
まつた」時の号にとどまらず、次の号でさらに新たな論客を得て、論考を並べるのです。まさに、世界の動きをわが事として受けようとする、やる気というべきか、勢いを感じますし、『幼児の教育』が、子どもにかかわることであれば社会的時事的関心事についての論戦を張る場でもあり得た（あろうとした）ということでしょう。

統いて載せる第七十九卷第一号では、行事について二〇人ほどに聞いたら六人から返事が戻ってきたということで、その六人からの行事についての報告が掲載されています。『幼児の教育』が何をなさんとするのか、幼児の生活の基本に立つた時、何を大

事に考えればよいのかを問うてている点において、以下四編の編集後記には搖るがぬ同じ思想が流れていることがわかるよう思います。

〔編集後記〕

第六十五卷第十号（一九六六年）

米国のジョンソン大統領が、四才就学の構想を発表したことをめぐって、新聞雑誌などにも就学年令引き下げに関するいろいろの議論があらわれ、また、文部大臣も、就学年令引き下げについて検討している由の談話を発表されたりしている。就学の年令を引き下げるという論の根拠は、近年、幼児の発達が早くなっている、いわゆる発達加速現象を重視するところにあるらしい。それに加えて、世界の科学教育に乗りおくれないよう、早くより知的教育を進めるとするという論である。

このような主張に対し、幼児教育の専門家は何と答えるであろうか。幼児の発達が、以前の幼児に比して早くなっている面のあることも事実である。

社会的関心や知的関心が早くにあらわれるようになつていることも経験するところであろう。しかし、それは、現在の小学校一年生の課程を引き下げることによつて、解決される問題ではないであろう。

いはまた、抽象的な科学的概念を早くに導入することによつてなされる問題でもないであろう。幼児

の発達は、一部には早くなつてゐる面がありながら、他面、幼児の生活を支配する精神構造は、幼児的な、かわらないものも多くあるであろう。

米国の学者にきくところによると、ジョンソン大統領の構想は、米国における貧困階層のための教育対策であるといふ。すなわち、就学年令を引き下げることによつて、貧困児もひとしく幼児教育の機会が得られるようなどいふ趣旨のようである。

発達が早くなつてゐるといふことから、学令を引き下げるといふように単純に結びつけて考えることは、ずいぶん性急なはなしである。現代の児の発達に適した生活環境と教育とを、児の生活の基本的理解に立つて、根本的に考えねばならない

問題である。発達促進化に対する性急な対策が、かえつて、児の真の能力の発展を阻害する結果になることを憂えるのである。

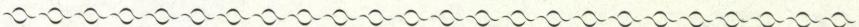
(T)

「編集後記」

第六十五卷第十一号（一九六六年）

南アフリカでは、人種問題が複雑に渦を巻き、中国では精神革命が嵐を起こし、世界は互いに衝突しあつてゐる。この夏の国際情勢であつた。

日本からは他人事のようみえるけれども、世界の舞台の上においてみると、中国、ベトナムは、日本列島と相接する地域、隣国である。南アは地球の反対側とはいへ、小さくなりつつある世界においては、アフリカはもはや決して世界の果ての密林ではない。人種の差を超えて人間は平等であることを主張する声の湧き起ころうとする。世界の動きを対岸の火事とみて、かりそめの平和に安住していることは許されないので現代である。今の瞬間には、



幼児の教育 目次	
— 第六十五巻 十一月号 —	
表紙	裏表紙
論評	
文部省年刊「子供と人」	解説
文部省年刊「幼稚園」	玄松 あさら (2)
幼稚園年刊「幼稚園の問題」	間 計夫 (1)
幼稚園年刊「保育」	波野 実印 (3)
幼稚園年刊「教科」	斎藤 としだ (2)
小説	香川 美早 (3)
児童小説「おとぎ話」	新井留吉 (3)
児童小説「おとぎ話」	鈴木 まこと (3)
文部省年刊「文部省の研究」	佐藤 雄次 (3)
文部省年刊「文部省の研究」	高谷 すけ (2)
論述	高谷 みじの (2)

▲『幼児の教育』第 65 卷第 11 号の目次

として教育しているであろうか。これは、現代の幼児教育に問われている問題である。

今の私共の身辺の社会にだけ適応するような人間であるならば、次の時代をなうにふさわしくないであろう。新しい事態に対面して、それを受けいれることのできる開かれた心を持ち、そこに新しい解決法を見出してゆけるような人間を、違った種類の人々とふれて、人間として心を開いていくことのできる人物を、これから世界は要求するであろう。

また、いろいろの人間や集団のいりまじる複雑な世界の中に、調和をつくることのできる指導者を世界は要求するであろう。日本の教育はこのようないくつかの問題を供給することができるであろうか。

国内においては、就学年齢引き下げなどの重大な問題が提出されているが、これが単なる思いつきや放言でないならば、実に重大な問題である。はたしてこれが日本の幼児の教育によい道をひらくことになるかどうか、これは大きな疑問である。

(T)

「編集後記」

第七十九卷第二号（一九八〇年）

運動会や入園式などの行事を、子どもの側から見ていると、疑問を感じることが多いので、今月号では行事報告の特集を試みた。いずれも本誌の「私の保育」に執筆された優秀な先生方である。二十人程度の方にお願いしたのであるが、六人の方から報告を頂いたのでそれを掲載した。どの園でも、行事は関係者の間で「綿密に」連絡し合い、準備にも、当日のことにも「気を配って」実施し、皆が気持よく過せるように工夫が重ねられていることがよく分る。

先生たちがこれだけのエネルギーを使っているから、園による個性があらわれている。報告を寄せて下さった方々には、今後の工夫のための材料を提供して下さったことを感謝したい。

この行事報告を見て、私は幼稚園の生活は、人工的なつくりものではなくて、生きた実際生活そのものであることを改めて考えさせられた。幼稚園の生

活は、ふだんは子どもと先生との生活であるが、行事になると、親や他のおとなたちも一緒に参加する。そしてそのときには、先生もただのおとなになって交わる。

園の側から言えば、それだけ大きなエネルギーを使っているから、子どもにもおとなにも満足のいく行事とすることができるのである。幼稚園の生活では、どこまでも子どもの日常の遊びが主である。

先生のエネルギーの主たる部分はそこに注がれるのが至当である。行事は、ときに墮性に流されがちな日常の反復に張りを与える。お誕生日やクリスマスが子どもに楽しみや希望を与えていることはだれもが身近に見るところである。また保育者は、幼稚園の先生も親も、日ごろ自分を抑えていることが多いから、ときには子どもと一緒になつて愉快になるのは自然なことである。

行事が子どもの悩みの種にならず、楽しみとなるよう願っている。

（津守）

〔編集後記〕

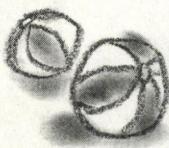
第八十二卷第六号（一九八三年）

すでに二ヵ月前のことであるが、四月号のこの欄で、私は入園式のことをとり上げると記したことを、四月号を手にしてはじめて気がついた。三月号では卒園式のことを扱つたが、四月号に入園式の記事はひとつもない。こんな自明な誤りを記したことを、まず、お詫びする。

多分、私は卒業式の別れのことを考えるのは苦痛で、むしろ未来に目を向けたいと思っていたので、こんな誤りをしたのかもしれない。また、それを書いていたころ、予算や社会関係のことで毎日が一杯だった。二月と三月は、教育関係者はだれでも多事多難だから、弁解にはならないのだけれども、子どもと一緒にいるときには、子どもの仕事ほど良い専門はないと思える。ところが、子どもの生活を成り立たせるための、まわりの環境を用意する仕事になると、こんなに大変な仕事はないのではないかと思うことがしばしばである。財政、制度、物的環境に

関すること。また、それをととのえるために人間の理解を得ることの困難さなど。ことに、子どもが存分に遊び、生活することができますよう、ひとつの幼稚園や学校を成り立たせるのには、現場の先生のみならず、主任や園長の苦労は並たいていでないことは、容易に察することができる。緊張に満ちた現代に、子どもの生活の基盤をあずかるとき、子どもと社会との中間に立つ仕事は、あるときには苦渋にみちている。けれども、いま目の前で成長しつつある子どものために良い生活の場を与える仕事をする人がなければ——この場合、実践と学問とは密接不離である——と思い返す。そうすると、中間の仕事自体が興味ある領域となる。この時代に、子どもを守る仕事には大変なことが多いが、それは、子どもから得るたのしみが大きいことに伴う税金のようなものかもしれない。

（津守 真）



◆多領域包括的教養的に思索するあり方

最近筆者が多少のやりとりをしている松居友氏が、彼が設立し館長を務めるミンダナオ子ども図書館のホームページ中で、絵本にかかる人々から、絵本がつまらなくなつた、という苦情が聞こえてくる、と書いています。そこでは絵本やその出版に纏つ

わるお話をされていますが、『児童の教育』誌のあたりようや、保育における知のあり方にも通じるようには思ひ、痛く共感しました。以下にコメントからのごく一部ですが抜粋します。

子どもの心を、絵本の外の世界へダイナミックに向かわせる絵本が本当に、無い、と感じる。他の絵本を見て、絵本に興味を持ち、絵本の世界から、絵本を作る。三次産業的に絵本は、3番煎じの出涸らしのような感じがあつて、絵本で育つた? ぼくには、趣味的でおもしろくない。

出版の本来の意味は、時代に向かつて語りかけ、時代を切り開くこと。

子どもや若者達の羽ばたきや旅立ちのきつかけを作ることだと思うのだが……。(中略)

絵本から、絵本の発想を得て、絵本を作るという、絵本から抜けられない絵本が多い?

絵本の外の世界から、絵本という形で本を作り、

松居氏のこのコメントに触れる前から、筆者が今回の特集で取り上げようとしていた記事の一つに、一九七二(昭和四七)年、第七十一巻第十号の編集後記があります。この号には、24ページもの誌面を割いて、「木材の話 山本孝先生をかこんで」と題する記事があり、山本孝、周郷博、田口恒夫、津守真各氏による座談会の様子が書かれています。文字としていくらか体裁を整えてありますが、おそらくはほとんどがお話ししされた言葉そのままです。山本先生は、木材のご専門家で林野庁の方のようです。当時、津守、田口らのいたお茶の水女子大学児童学科というところは、山本先生に限らず、棟方志功、

一番瀬康子など、実に多彩なゲストを伝手さえあれば分野など限定せず講師に招いていたことで有名でした。真に一流であるということだけが基準であつたのかもしれません。そして、この座談会記事に限らず、たとえば「幼稚園教育実際指導研究会」とい

うところでの、美術や絵画あるいは言語についての講演など、かなり長い講演録を、ほとんど手を入れずそのまま掲載するということが、『幼児の教育』誌上では頻々とありました。

さて、件の編集後記に戻りましょう。二〇一一年の現代にあっては、木の家具、木のおもちゃなど、その良さについてことさらに述べることもなく、むしろ、言い古されている気さえします。しかし一九七二年といえば、第二次高度経済成長期と呼ばれる波が終えんを迎へつあったものの、まだまだ経済効率や生産性の高さなどへのしっかりと反省はなされ得ず、自然のものよりも人工の物を尊び、消費を美德とする時代であったでしょう。大量生産として過去として今この時に背負つてしか、もの作

のは、無批判にそれらが受け入れられ実行された時代を経てしばらくしてからのことです。

一九七二年のこの巻末文章について考えている時にちょうど、前掲の松居氏のコメントに出合い、また、時を同じくして、保育家具や工芸家具を作る仕事をしている知人から、古いからという理由でモノがどんどん容赦なく捨てられている時代があつた、というお話を伺いました。そして、その中でも捨てられずに今も残されているものに出会うと、よくぞ捨てられずに残つていてくれた、と感慨を深くする、と。けれど、その残されたものの中には、たとえばペンキが幾重にも塗り重ねられた古い古い木の椅子があつたりする。半ば無思想にいささか乱暴にペンキを塗り重ねたことを、ただいけないことだつたと批判し軽蔑して無理やりペンキをはがそうとするのではなく、古い木の椅子であることと、ペンキを塗り重ねてしまったことやペンキをはがせば椅子そのものを傷つけるかもしれないこととの両方を、年輪として過去として今この時に背負つてしか、もの作

りをする人間としてこの椅子と向き合うことはできない、という言葉は、人と歴史とのかかわりの深淵をとらえているように思えました。

時代の要請するものが大きく変わつていつたその時はまさに、合成樹脂に代表されるような新しいものが良いとされるような、まだまだ科学信奉とでもいう世の雰囲気があつたのではないかと思ひます。古くはオーネックレスであつたものを失うことへの警戒と、それが柔らかい皮膚をもつ子どもという生體によからぬ影響を及ぼすであろうという懸念は、どんなにか先駆的であつたろうと思います。

また、統いて載せた第八十一卷第七号、第八十三卷第五号はそれぞれ、本田和子氏、皆川美恵子氏により書かれたものと思われますが、幼児教育という嘗みそのものを超えた、別の枠組を必要とするような、深さのある論考です。広義の児童文化に造詣の深い皆川氏らが時の主幹本田氏を支えて編集にあたられた折には、このような「文化の香り高い」編集後記になることもたびたびでした。門外漢にとつて

は、その道に通じてることにひたすら感心するよりほかなし、という格別さでした。

「編集後記」

第七十一卷第十号（一九七二年）

現代の私どもの生活、そして子どもたちの生活の中から失われつつある大切なものがいろいろあるが、物的な環境の中からその一つをとれば、木材の建物や家具である。今月号の山本孝氏を囲む懇談会では、新しく学ぶところが数多くあつた。木の床や木のいすは、冬暖かく夏涼しく、体の湿氣を吸つて人の健康のみでなく、気持ちに落着きを与えるといふこと、幼稚園の環境づくり、新築、改築のときなど、考慮せねばならぬことがいろいろ示唆されていく。先日も、幼児用の木製のいすをそろえたいと思ふ業者に注文したが、どこでも量産していないといふことに驚いた。子どもの心に落着きを与えていたらしく、パイプ製ビニールばかりのいすよりも、木のいすがはるかにまさつていることは、うなづける。

幼児の生活が快くなるように、木のいすが再び量産

されて簡単に手に入るようになることを望みたい。

現代の生活の中から失われつつあるもののもう

一つは精神的なもので、空想や想像の生活である。

子どもたちは一枚の紙きれ、一片の木片を、生きているかのように話しかけたり動かしたりしてあそぶ。

お人形を自分自身のようにかわいがる。以前に番町幼稚園におられた徳久先生からうかがつたことであるが、先生の若いころの毎年の仕事の一つは、担任の子どもたちの一人ひとりに、その子のお人形を作つてあげることだったという。いまの人形は合成樹脂で作られており、修理もできないし、手がもぎれたりよごれたりすると、母親はどんどん捨ててしまふ。人形に対する子どもの愛着、手がとれてしまつた子どもの悲しみに気がつかないかのようである。

ぬ課題であると思つ。(津守)

今月号の巻頭は、お茶の水女子大学の現学長、谷田閑次氏に書いていた。谷田先生は、服飾美学の専攻の学者である。

「編集後記」 第八十二卷第五号（一九八三年）

珍しく雪になつた。春一番が吹いたといふのに、冬が巻き返しに出でているのだろうか。窓外に、霏々と降りしきる雪片を見ながら、五月号の奥付を書く。月刊雑誌とは、奇妙なものだ。

然し、考えてみれば、私どもは「幼児教育」という名の営みにおいて、同じようなことをくり返しているのではないか。いま、「四才」の彼らと対しながら、私どものまなざしは、時として何年か先だけを注視する。彼らのはずむ呼吸や汗のにおいにもまして、「大きくなつたときに困らないこと」が気に入るようにせねばならないし、幼稚園が考えねばならぬ。空想の未来が、子どもたちの「いま」を凌駕

するのだ。

しかも、私どもは、何故かそのことのおかしさと
空しさに気付きにくい。雪降りの日に、五月の保育

を語ることの不自然さは自覚されても、四才の子ども
を大人の時点に直結させることの不確かさは、意
識されにくいうのだろうか。彼らが大人になつ
たとき、その世界が、私どもの予想の範囲内にある
という保証は何一つ与えられていないというのに。

そこで、五月の風を想定することを止めて、とり
あえずは、窓外の雪を見つめてみる。高層ビルの外
に降る雪は、大まかに、一通りの動き方をしている。
私に近い手前の雪は、頬りなげに浮遊し、横に流れ
て、地上に真すぐに降りていかないよう見える。

とすれば、幼児と呼ばれる幼い人たちを脅かす正
体不明のあの不安、例えば、気がついてみたら親し
い人々がみんななくなつて、たつた一人、見知ら
ぬ世界に遺棄されているのではないかという、あの
捨て子の不安や、いつもと同じ道を歩いているつも
りが、いつかとてつもない迷路に迷いこんでしまつ
て、どこまでいつても家に帰り着けないのではとい
う、ゆえもない迷い子への恐れなど、この訪れる喪

するということが、遠くを見ることでもあるという
ことだ。私どもは、子どもたちの「いま」を熟視し
ているだろうか。

(H)

「編集後記」

第八十二卷第七号（一九八三年）

失への予感とその先取りと言えるかも知れない。私どもにとつて、置き去りにされ、見捨てられること

への脅えは、懐しい悪夢とも言うべき奇妙な想い出の一つであるように見える。

私どもは、誕生という形で始原的な分離を体験している。母胎内の至福の安息、フロイト流に言うならニルヴァナの状態からのこの分離は、私どもに、元型的な捨て子体験として刻印されるのではない。か。そのゆえに、数多くの民族が、その始祖神話を一種の捨て子物語として語り始めるのかも知れない。偉大なる始祖の神は、しばしば、両親に遺棄され、あるいは両親を失なった孤児として、この世に出現し、そのゆえの迫害の中で様様な奇蹟を発現して神性を顕現するのである。

人々は、みずから始原的な捨て子体験を、神話という象徴言語で語り継ぎつつ、自身への慰めと励ましとしたのでもあろうか。私どもは、「常に捨てられつづる」人間の、とりわけ幼い人たちの孤独に対して、鈍くあつてはならないだろう。

〔編集後記〕

第八十三卷第五号（一九八四年）

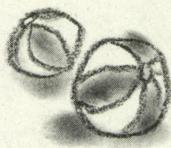
京都を訪ねた昨年のこと、府立総合資料館の幾重もの扉を鍵で開けた向うの、玩具保存庫で、日本各地の郷土玩具を眼のあたりにすることができました。石沢誠司氏は、私どもを案内して下さった玩具部門の専門員で、その折、約した依頼が実り、今号の掲載となつたのです。

郷土玩具のうち、私どもは、伏見人形の魅力に吸い寄せられていました。学業成就をかなえる牛乗り天神、火防せの神であり、安産の守護もする布袋、子どもの湿疹・クサを食べてくれる牛、夜泣きをとめる鳩、子どもが亡くなつた時、埋葬に用いる友引き人形、デンボ・ツボソボと呼ばれる器類……、どれもこれも呪術的な魔力を秘めた土人形でした。

さて、旅の終りに、五色の楓を観るべく泉涌寺へ足を向け、塔頭廻りをしていた時のこと、伏見人形とは、このように使われていたのかと、まざまざと眼にとびこんできた光景があります。七福神の一つ

布袋をまつるその塔頭では、安産祈願を司り、岩田帶を授け、井戸から独活水を汲みあげます。そして椎の実がこぼれる境内の一角には石船があり、そこには、安産の願がこめられた伏見人形の布袋たちが、たくさん堆く、積みあげられていました。色もはげ落ちた古い布袋たちは、にこやかに笑っていましたが、どれだけの京童をこの世に連れ来たつたことでしょう。

布袋は、九世紀から十世紀頃の中国の僧で、位や名声を望まず、生涯、杖と袋で、放浪生活を送りました。日本では、布袋は唐子と取り合われ、絵画に頻繁に登場してきますが、袋の中から、子どもたちがワアッと出てくる図像など、布袋は子どもの宇宙を支える主管者の如き趣きがあります。大きな腹をした、のどかな布袋は、どこか狸にも似ていますが、狸は徳利とお通いを手にして、子どもとは遊んでくれそうにありません。(美)



◆ 誌面作りへの直截な言及と支え手への賛歌

編集主幹を中心に、編集にはいろいろな人たちの手がかけられています。編集そのものについて触れた編集後記の何編かに触れてみたいと思います。

「編集後記」

第八十三卷第十二号（一九八四年）

一九八四年も最終号を迎えた。雑誌の凋落が著しく、本誌もその例外ではない、しかし、とにもかくにも、一年の歩みを終えた。

この一年、教育の世界は、必ずしも、よい方向にのみ動いていたとは言い難い。教員養成に関する再検討、あるいは教育要領改訂への始動、そして臨教審の設置など、公に主導される様々な改革案は、そもそも、何を志向し、何をはらんでいるのだろうか。公の側が改革に熱意を示すときは、それだけ現行秩序が脅かされ、危機感が高まつて、いることの徵であ

ろう。関係者一人々々の善意を超えて、それは、現行秩序の維持に奉仕する動きである。そして、私も「大人族」は、よくも悪くも、現行秩序の側に属していることを忘れてはなるまい。公の動きに加担するにせよ、それを批判して異を唱えるにせよ、あるいは無関心であるにしても、それらはいずれも、現行秩序の体系に、既に組み込まれ、一つの位置を獲得した者の立場からなされる営為なのだ。「教師」とい、あるいは「母親」というも、すべて現行秩序の中で公認された「ポジション」であり、「役割」であることは自明なのだから。

私どもの存在そのものを、時々刻々、活性化し新しく蘇らることの意義は、ここに見出される。本誌が、新しい年も発刊を続けようとすることの意義も、恐らくは、ここに求められるであろう。(H)

「編集後記」

第九十五巻第五号（一九九六年）

今月から「子ども時代と私」の連載が始まりました。戦時下に子ども時代を過ごされた大先輩の方々が、自身の幼少時代をどの様に記憶されていらっしゃるのかを、貴重な資料とさせていただきたく企画致しました。そこから逆にこれから幼児教育の中で大切にしていくことに思いを巡らせることができればと考えています。

*

この連載のスタートと期を同じくして、今月号には、二十世紀の終わりと二十一世紀への橋渡しを考えさせられる記事が目だつたように思います。

本誌の創刊も二十世紀と共に始まつたことを思う
私どもの存在そのものを、時々刻々、活性化し新しく蘇らることの意義は、ここに見出される。本誌が、新しい年も発刊を続けようとすることの意義も、恐らくは、ここに求められるであろう。(H)

子どもたちが、秩序の枠組から自ずから逸脱し、その特有の生を自在に紡ぎ出す存在であるとすれば、私ども大人は、明きらかに彼らとは異なる岸辺に佇んでいる。とすれば、私たちは、メディエーターなのだろうか。私たちの営みは、みずからの身体を介して、この両者を「どりなそ」とすることかも知れない。

と、隔世の感がするとともに、私たちが大切にしたいものは脈々と続いて変わらずにあることを思われます。ただ現実の環境には、それを行うために多くの障壁があるのも確かです。それを一番痛切に感じているのは、子どもたちと日々を過ごされている保育者の方々かもしません。しかし「保育の実践研究について考える」の記事の中に書かれている「日々の保育活動と深く結びつき、より充実した保育を実現できる方向で実践者を生き生きとさせるものになる」ような保育現場からの実践研究が、それらの障壁を乗り越えていく一つの力になるのではないかとも考えます。

このような記事を載せていく企画も現在検討しています。

(田)

今年は創刊一〇〇巻を記念して、毎号、これまでの本誌にゆかりの方々にご執筆いただく予定です。また、四月号には、津守真、本田和子、田代和美の三人の歴代主幹による座談会も予定しております。そのほかの企画も準備しておりますので、どうぞご期待ください。

今年は表紙絵を片柳淳子先生に、カットは彌永たえ先生にお願いいたしました。一年間、どうぞよろしくお願いいたします。

表紙の右隅には創刊号の表紙を載せました。当時の誌名は『婦人と子ども』で、題字を東京女高師校長高嶺秀夫、絵を同教官荒木十畝が描いています。『幼児の教育』は今月号で第一〇〇巻を迎えるまし

た。一九〇一年の創刊以来、二十世紀と共に歩み続けてきた本誌ですが、こんなにも長く続いてきたのは、多くの執筆者や読者の方々のご支援のおかげと感謝しております。今後ともどうぞよろしくお願ひ申しあげます。

*

〔編集後記〕

第一〇〇卷第十二号（二〇〇一年）

創刊一〇〇年を記念して、毎月それにちなんで記事を載せてきた一年も本号で終わりを迎えました。本誌にゆかりのある多くの方々にいただいた原稿から、改めてこれまでの経緯を知ることができ、また時代の推移を感じた一年でした。

この巻を閉じる本号では、一〇〇巻にちなんだ文章の中で、「本誌が一年一年と少しずつ保育者には何の役にも立たないものになってしまい……」という厳しい言葉を頂戴しました。保育者を指導する。本誌がかつて大きな役割を背負っていたことを改めてています。「（絵は）何分淡くって地味でパツとしないです。：（題字は）雑誌の表題の文字として素人向きがしません。私も弱りました」。私はこれこそ本誌を代表する表紙であると思っていましたので、これを読んで、大変驚きました。

(A)



▲「婦人と子ども」創刊号の表紙

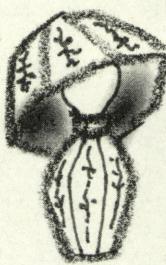
「自分と向き合う時間を重ねて、ようやく原稿が書き上がる」プロセスが書かれています。「『書く』ことは、消化しきれずにたまっていたものを反芻し、きちんと消化しなおすことであつたのだと、いまからためて思う。消化したものは栄養となる」という一文は、保育者のひとつの学びの在り方を示唆します。また他の人が書いた文章を読んで自分の保育を考えることもこの延長上にあるのだと思います。

この小さな雑誌にできることは何か。課題が山積みにされた一年でした。第一〇〇巻は幕を閉じます。が、これからも課題は追求し続けていきます。

(田代 和美)

紙幅の都合で掲載できないことが残念ですが、二〇〇一年には毎号、一〇〇巻を記念する記事が掲載されています。特に『『幼稚の教育』と私』と題する記事には編集を陰で支えた方々が何人も文章を寄

せておられ、その明るい苦労ぶりや編集を通して感じたことなどが生き生きと書かれていて大変興味深く、また感慨深いので、ぜひお読みいただきたいと思います。当時編集主幹であつた田代和美氏の、陰にひなたに編集を支える支え手へのまなざしを思ふ、一〇〇年続いた雑誌を誠実に、今この時に引き取り未来へつなげていこうとするその見識と覚悟の深さに頭が下がる思いがしました。また、その巻の第一号で津守真氏が「私が『幼稚の教育』誌の編集にたずさわった頃」という一文を巻頭に寄せており、後の者にはおよそ知り得ない倉橋や及川氏との編集の様子の実際や創刊時の編集者東基吉について、また、教育基本法との関係をどうとらえるかについてなど書かれているので、こちらもまたぜひお読みいただきたいと思います。



◆そしてこれからのお子様へ

今回この原稿を作るにあたって、実際冊子を手にしてページを繰る以上の相当な分量の『幼児の教育』を、パソコン画面上で確認しました。ネット公開にこれほど助けられることがあるとは、通常やはり紙の感触のある媒体でものを読むことを好む者としては、まったく想像していませんでした。そして、その中から、これもまた相当な量の記事の打ち込みを、職場の仲間である満田琴美さんが一手に引き受けました。ちなみに、一月号、二月号のアイカイブズ特集に登場した記事の打ち込み作業もほとんどすべて満田さんの手になるものです。心から感謝です。

また、数年前から筆者は、編集風景に近いところに身を置くようになりました。執筆者、編集サイド、出版サイド、三者をもり立て、やる気を削がぬよう、誰の言い分も聞き過たぬよう、仲を

取り持ち形にしていくその繊細な心配りや誠意たるや、とても言葉に尽くせません。

これから時代、私たちはネット版の『幼児の教育』を多用することでしょう。それでも、本にはめくる時の音、紙の質感、緩じ部分へと誘われることでその世界に入っていくような心地よい緊張感、高揚感があります。手に取り、表紙を見、本を裏に返して1ページめくつて編集後記を読む。うなずいたり首をかしげたりしながら編集後記を読んでみて俄然、本編を読もう、という気持ちが高まる。そんなふうに『幼児の教育』と毎号つきあつてきただ読者を、私は一人ならず知っています。読んできた質量たちを実感し得る媒体として残してきたこと、その実体ある冊子をほかならぬ生きた人間が作り続けてきたこと、そんなことの意味も問い合わせていたいと改めて思うのです。

最後に、二〇〇七年五月の、現編集主幹浜口順子による編集後記を掲載し、この小さな冊子にかかるられた、またかわられるであろう人たちへのはな

むけとしたいと思います。

(お茶の水女子大学専任講師)

「編集後記」

第一〇六卷第五号（二〇〇七年）



北海道は桜がこれからなのだろう。以南の日本ではそろそろ百花繚乱の5月である。数年前に「世界で一つだけの花」という歌がはやったが、近ごろの流行歌のタイトルにはやたらと「花」が目立つような気がする。星先生（巻頭言）によると、フランス語で「発達」という言葉には「花が開く」という意味があり、「喜びに満ち満ちて顔が輝いている状態」のことともいうと知った。オランダに2年ほど滞在していたころ、その長い暗い冬の終わりに、道端でクロッカスが土をもたげて顔を出していふのを、と見出した時、飛び上がるほどうれしくて、喜びがこみ上げてきたことを思い出す。現代という季節が「花」を求めているのだろう。喜びに満ち満ちて顔が輝く子どもの姿を待ち望むよくな保育を目指したい。

* この特集は今号で終了いたします。